

「いっしょに歩こう！プロジェクト」 2年の活動を終えて そしてPart IIへ

日本聖公会 東日本大震災被災者支援
「いっしょに歩こう！プロジェクト」
宮城県仙台市青葉区国分町3-4-5 クライスビル2F
TEL 022-265-5221

多くの祈りと奉仕への感謝

「いっしょに歩こう！プロジェクト」代表
日本聖公会首座主教
北海道教区主教
ナタナエル 植松 誠

2011年3月11日午後2時46分、東北地方から関東、北海道まで広範な地域を揺さぶった大地震と、それによって引き起こされた凄まじい規模の大津波は、私たちの想像や理解を遥かに超える大災害をもたらしました。

日本聖公会では大震災発生直後から、いろいろな形での救援・支援活動が開始されました。最初の頃は、交通・連絡・通信の手段も無く、被災の状況も把握出来ない中、各教区では、食糧や日用品、毛布などを独自のルートで被災地に運びました。世界の聖公会からも、支援チームや救援物資を送るなどという申し出もたくさんいただきましたが、日本聖公会としてはその時点においては、被災者のために、支援活動のために祈ってほしいというメッセージを伝え、実際、世界中の教会が、そのために祈ってくださいました。

2011年5月には、それまで各教区や団体などが個別に、或いは共同で行っていた救援・支援活動が、「いっしょに歩こう！プロジェクト」として開始されました。そして、被災地数か所の支援センターや外国人支援など多くの活動が行われました。その働きのために、日本中の教会から、また海外から実に多くの献金が寄せられ、また救援・支援物資が届けられ、多くのボランティアが被災地に来てくださいました。大韓聖公会はじめ海外からも首座主教や聖職・信徒が訪ねてくださいました。そして、これらの活動を支えてくださった最も大きなものは、皆様の祈りであったと思います。日本聖公会という小さな教団が、「いっしょに歩こう！プロジェクト」としてこのような活動ができたことは、ひとえに国内、海外の皆様の祈りとご支援によるものであったことを今改めて感謝し、心からのお礼を申し上げます。

「いっしょに歩こう！プロジェクト」は発足当初から、2年という期間を定めて活動してきました。それは、限られた予算とマンパワーの中で、責任ある活動をするために必要でした。今年5月でその2年を終えます。しかしながら、被災地ではまだ多くの被災者が支援を必要としておられます。また、東京電力福島第一原発事故による被災者は、今後の見通しがまったく立たない中で、恐怖と不安の中で不自由な生活を余儀なくされています。日本聖公会は、これらの被災者といっしょに今後も歩いていきたいと願い、今までの「いっしょに歩こう！プロジェクト」の活動終了後も、新たな枠組みを考えながら、東北教区としての働きに協働し、また原発関係では、管区的な活動を開始していくことにいたしました。どうぞこれからも引き続き皆様のお祈りとご支援・ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

「いっしょに歩こう」「敬意を払って」のこと —プロジェクト本部長として・また東北教区主教として—

「いっしょに歩こう！プロジェクト」本部長
東北教区主教
ヨハネ 加藤 博道

東日本大震災発生後の、そしてまた「いっしょに歩こう！プロジェクト」発足からの全国の教会、関係諸施設、聖公会関係諸学校の皆様の多大なご支援とお祈り、そして労苦に、心よりの感謝を申し上げます。

大震災発生後、各教区で立ち上がっていた「対策本部」等が首座主教の召集のもとに会合、日本聖公会全体の取り組みとしてこの大震災に向き合うことが決定し、常議員会の承認を経て4月29日に仙台で行われた第1回の運営委員会が、このプロジェクトの出発点となりました。「復興支援」ではなく、「いっしょに歩こう」という名称が決まったのも、この時でした。また活動のスローガンにある「困難を負って生きる人々に敬意を払っていっしょに歩きます」という少し変わった文言も、この時の議論から出てきました。

日本社会の近代化、経済成長の中で、大都市と地方の様々な格差が生じ、東北だけではありませんが、しかしやはり東北は周辺化されてきた歴史を持つ地なのではないか。津波の被害は壮絶なものでありましたが、その前から町は「シャッター通り」でもありました。「復興」とは、どこに戻る事なのか。同時に、それらの地には特有の風土、文化、人々の誇り高い歴史があります。「可哀そうな人を助ける」というのではなく、わたしたち自身の生き方や価値観に関わる事なのではないかと。原発、放射能に関する事もそうです。

ある人はマーガレット・パワーズの詩「あしあと Footprints」を思い浮かべていました（「苦しみや試みの時に。あしあとがひとつだったとき、わたしはあなたを背負って歩いていた」）。私自身は、日本聖公会宣教150周年礼拝におけるカンタベリー大主教ローワン・ウイリアムズ師の「はだしの宣教」という説教を思い起こしていました。いずれにしても、被災地の歴史と文化、状況、思いを尊重しながら、自分たちの生き方を振り返りながら、被災者と共に、日本聖公会各教区が共に、そして主と共に、一步一步歩んでいきたいと願って決められた名称でした。決して教会中心の支援しかないという意味ではありませんが、しかしやはり地域の中に長い年月根ざしてきた東北教区の教会や幼稚園・保育園を拠り所としながら、地域の方たちとの顔の見える関係を丁寧に作っていかうと、それもプロジェクトの一貫した姿勢であったと思います。一方、障がい者施設や、在日・滞日外国人の方たちとの接点は東北教区の大変弱い点でした。日本聖公会の中の、これまでの豊かな経験が、そうした側面を補ってくれました。

日本聖公会として初めて、一つの大災害に教団として取り組んだ出来事であり、多くの方の力、お祈りとお支えに心より感謝しますと共に、初めての経験故の不慣れさ、力不足、ご期待に沿えない部分も少なからずあったことと、申し訳なく思っています。

今後は「いっしょに歩こう！パートⅡ」として「ギアチェンジ」をしながら、東北教区は地域の教会をやはり拠点としながら地道でも持続可能な仕方で祈りと働きを続けようと思い、また「原発・放射能・ふくしま」に関する事は改めて日本聖公会としての取り組みとなろうとしています。引き続き、お祈りのうちにお覚えくださいますよう、そして被災地をお訪ねくださいますようお願いいたします。

「いっしょに歩こう！パートⅡ」へ

〈1〉東北教区として

「いっしょに歩こうプロジェクト」プログラムディレクター
被災者支援センターしんち センター長
東北教区磯山聖ヨハネ教会復興プロジェクト委員長
司祭 フランシス 長谷川 清純

大震災の発生から2年と数ヶ月間、小名浜、新地町、名取、仙台、石巻、南三陸町、気仙沼、大船渡、釜石で、「いっしょに歩こう！プロジェクト」のスタッフやボランティアたちは、時間の経過と共に揺れ動く感情の被災された方々や町民と共に過ごしてまいりました。人と人の心の通った思いやりや、お互いを大事にとの気持ちで会話をし、お茶を飲み、手芸をしたり土に汗を流したり、笑い合い涙し合っごいっしょの時間を共有してきました。その背後で支えているのは、全国の教会の皆様が届けてくださる支援物資ばかりでなく、寄せてくださる思いと祈りであると痛感しています。

他方、県や市町村が精一杯復興事業の推進に努力しておりますが、やはりそのスピードは決して速いものとは感じていないのが実情です。それでも例えば、センターしんちからは国道6号線を挟んで、左右（東西）2箇所の山地で集団移転先の宅地造成が急ピッチで進められており、造成工事完了と住宅建築は年内から翌年にかかるようですが、その光景は仮設にお住まいの皆様にとって、まさに希望の光となっています。

さて、東北教区は6月から「いっしょに歩こう！東北（仮称）」として被災者支援を続けて参ります。少人数のスタッフ態勢でオフィスはそのまま（仙台基督教会・東北教区主教座聖堂・教区会館が竣工するまで）使用します。そこでは東北教区の身の丈に合った規模と支援内容に移行していきます。小名浜、新地、釜石等の支援は、地域にある教会や幼稚園・保育園の働きを大切にしつつ被災者と繋がるものとしたいと思います。具体的には、釜石被災者支援センターは開所2周年目の8月末をもって閉所し、釜石神愛教会と神愛幼児学園を拠点にして伝統と信頼を基にしていきます。新地町のセンターしんちは、もう1年間は変わらずに町民の皆さんとごいっしょに歩いていきます。小名浜は聖テモテ教会と聖テモテ幼稚園にあって、さらに原発事故で避難された人たちにじっくりと寄り添い続ける姿勢を貫いて行かれます。福島県内の避難者支援活動と連携しながら、それぞれの地において、お互いに敬意を払い合いながら、イエスさまに励まされて毎日を支え合っていきます。

ところで、新地町・磯山聖ヨハネ教会・旧ふじ幼稚園巡礼をセンターしんちでは大事にしてきました。毎月11日は大震災記念の日として、死者・行方不明者の光明と平安を祈る大切な日と認め、集まった人たちは被災の地を巡り、逝去者を覚えて祈りを献げています。この行為は、被災された方々に限らず、訪問者やボランティアたちにとっても、そして私たち教会信徒にとっても極めて重要です。「巡礼」は、これからこそがメインプログラムになると捉えています。まだまだ、あの3月11日を忘れないために。皆様には折を見て、小さな巡礼の旅のご案内を提供したいと考えています。

信徒が犠牲となった磯山聖ヨハネ教会礼拝堂再建は是非とも成し遂げなければなりません。再建礼拝堂は旧建物の材料、備品を数多く再利用して再創造されます。それは東日本大震災を記念したメモリアルな、慰霊、鎮魂の所となるでしょう。その実現のために祈り、求めていきたいと思ひます。以上の様子は、できれば定期的に何らかの方法でお伝えしたいと思ひます。同時に、教区会館内に東日本大震災資料室を整えていきます。

どうか皆様のより一層のご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます。

「いっしょに歩こう！パートⅡ」へ 〈2〉原発と放射能に関する特別プロジェクト

原発と放射能に関する特別プロジェクト
運営委員
司祭 テモテ 野村 潔

巨大な地震と津波は、東京電力福島第一原子力発電所を襲い、重大な損傷を与えました。それによって飛散した放射能は、福島県内にとどまらず、国内外の大気、土壌、海洋などを広範囲に汚染し続けています。あれから2年を経た今も尚、様々な面で人々の生活と人生に重大な影響を与えています。

「いっしょに歩こう！プロジェクト」の活動方針の2番目に「原発事故とその影響について、深い関心を持ち、情報を収集・発信し、国内外に対し責任ある活動を行います」という項目があります。これから何が起こるか分からないような状況ではありましたが、この原発事故と放射能汚染について、決して逃げるわけにはいかない課題だという認識を共有してきました。2年を経た今も、被災者をめぐる状況はより深刻さを増してきており、一方、被災地から離れた地域では、関心が薄れてきているという現実もあります。しかし、決して原発の危険性と放射能汚染が収束したわけではありません。日本聖公会として、今、福島において、日本において、原発や放射能をめぐって何が起こっているのかという現実を、国内外の教会に伝え続ける役割と責任が生じているのです。

原子力発電の危険性は、従来から指摘されてきました。殊に日本は、広島・長崎における被爆を経験した国として、世界に先駆けて放射能汚染の深刻さについて、また原子力の危険性について、語り伝えるべき役割がありました。しかし、その日本において放射能廃棄物の処理方法も確立されないまま、これまで54基もの原子力発電所が設置されてきたのです。それは、私たちが過去の悲劇に学ばず、あえて原子力の危険性に目をつぶり、原発の建設を容認してきたことを意味します。

2012年5月に行われた日本聖公会第59（定期）総会では、「原発のない世界を求めて～原子力発電に対する日本聖公会の立場～」という議案が主教会から提出され、決議されました。その決議文の最後は、「私たちは教派・宗派を超えて連帯し、原子力発電所そのものを直ちに撤廃し、国のエネルギー政策を代替エネルギーの利用技術を開発する方向に転換するように求めます。そのために、利便性、快適さを追い求めてきた私たち自身のライフスタイルを転換することを決意します。苦しみや困難を抱える人々と痛みを分かち合い、学び合い、支え合って生きる世界を目指します。」と締めくくられています。

日本聖公会常議員会では、上記活動方針と総会決議に示された活動を行うため「原発と放射能に関する特別プロジェクト」の設置を決定しました。

具体的な活動内容の検討はこれからですが、「特別プロジェクト」では、福島県内に拠点を置き、子どもたちのためのリフレッシュプログラムをはじめ、避難住民への支援、放射能に関する啓発活動、被災状況の調査、広報など広範囲な活動を、他教派、他団体と協力・連携しながら行ってまいりたいと考えています。長期にわたる活動になることも予想されず、働き人を養成しながらこの働きを継続し、少しでも日本聖公会としての責任を果たしていくことができますよう願っています。